



静脩

2000年12月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 37, No. 3

## 外国農林業の研究と図書・統計・資料

農学研究科教授 辻井 博

日本の農林水産業とその他諸産業は外国のそれら産業と密接な関連性があり、この関連性はグローバリゼーションのためさらに深化してきた。そしてこの深化は日本と諸外国に経済成長という経済的利益をもたらすとともに、所得分配の不平等化や経済の不安定化などの経済的不利益と環境破壊をもたらしてきた。

この関連性とその功罪の視点から、私は過去30年ほど外国特にアジア諸国の農家・農村・農政を対象にした研究を行ってきた。そしてその期間、アジア、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカなど諸国の膨大な図書・資料を主として個人的に集め、研究に利用してきた。現在自宅と大学でこれら資料に囲まれ、多すぎて収納場所と適切な利用が困難になっている状況である。個人図書館を形成しようとし失敗しつつあるともいえる。

なぜこのようになったのかを改めて考えてみた。主たる理由は私の研究方法と図書館との関係にあると思う。私の専門分野は農業経済学という応用経済学で、各国の農家・農村経済・農業政策・農林技術・経済と政策・自然資源・環境の総合的視点から農家・農村・農業部門における諸問題と法則性を経済学的方法に重点をおいて研究する。したがって必要な印刷された資料は

これら総合的視点に関する各国の大学・研究所、政府機関、出版社、私企業、NGOなどが出版する図書・統計・資料となり、必然的に多岐・多量になる。これらが国内の



図書館に利用可能な形で収集・所蔵されておれば私個人がこれら資料を収集する必要はない。しかしかつてはそのような状態にはなかった。30年程前、私の研究を進めるため日本の図書館にどれほどの図書・資料があるかを国会図書館やその他東京と京都の関連図書館を調べてみた。ほとんど無いというのが私のそのときの結論であった。この結論は私が京都で研究を続ける過程で確認されていった。だから上で述べたような個人図書館の形成を行ってきたのである。1回の現地調査で1～2メートルの図書・資料を購入・収集し、このような現地調査を年に5回ほどは実施してきた。資料がたまるはずである。外国の農業の研究をしている日本の研究者は多分図書・資料に関して私のような問題に直面してきたと思う。

日本はスペースが超希少資源の国である。いくら自分の学問の研究方法が要請するといつて

も、個人図書館形成の企てはほぼ必ず失敗の運命にある。私もその運命に従っているように思う。捨てるということも失敗回避の方法であろうが、これもなかなか難しい。

図書館の方が変わる可能性はないのであろうか。私の友人に聞くと、IT面で日本の図書館システムもかなり進歩しており、PC検索、ILL、電子図書館、電子ジャーナル、決済上の問題の残るオンラインブックストアなどがある。外国の図書・資料の購入方法もかなり改善されたと言われている。私も少しは知っている。しかし司書の重要性和図書館間の分業は重要であるとする。

私の少ない経験ではあるが、アメリカの大学図書館や研究所の図書サービスは日本のものとかなり違うように思う。アメリカの大学図書館は、大学により分業するような形で特定の研究対象国の文献・資料を専門的知識の高い司書を雇って集中的に集めているようである。これは日本人研究者などからの伝聞である。私はむかしイリノイ大学で修士論文と博士論文の研究をしたがテーマが計量経済学という非常に狭い分野であったから、私が今問題にしている外国農業の研究に関する文献・資料が十分あるかということは関係なかった。ある研究者が特定国の研究をするときはその国の資料・文献に特化した大学の図書館を利用すれば良く、個人で資料・文献を集める必要はない。また15年ほど前ワシントンD.C.にある国際食糧政策研究所(IFPRI)の上級研究員として勤務したとき、所長が「よく来た。あなたは雑用に惑わされることなく研究に専念して下さい。」といったのを今でも鮮明に記憶している。実際その後の毎日には研究に専念でき、研究成果も大いにあがり、日本の国立大学の教官の毎日との大きな差を実感した。同国際研究所そのものには大きな図書館はなく、外国の文献資料を大量に収蔵してはいなかった。しかし必要なら首都ワシントンにある大学やその他の研究所の所蔵する図書・資

料を利用できた。また同研究所の司書は私に「外国の研究に必要な資料・文献はすぐに直接当該国から収集しますから、申しつけて下さい。」と告げた。例えばタイ国の英語とタイ語両方を使って出版されている政府出版物をすぐに取り寄せてくれた。タイ語のみで出版されているものの取り寄せは少し難しかった。さらにアメリカの大学や研究所では、秘書や最近日本でも導入されてきた研究助手が昔から充実しており、研究に専念できる体制が整っているようだ。アメリカの図書館制度の下では研究者個人が外国の資料・文献を多量に集め、研究事務に多くの時間を割かねばならない必要は少ないようである。

日本の外国を研究対象とするいくつかの研究所の外国文献・資料の収集について少し知っている。かつてはこれら研究所に研究対象国の資料・文献はあまり無かったのだが、その必要性和必然性からその後研究所の資金でかなり集めるようになった。問題は専門性の高い司書制度が十分ではなく、図書・資料の収集は最近まで所属の研究者が調査対象国へ調査に行ったついでにその専門分野の視点から購入することが多かった。だから収集される文献・資料に経時的・分野的体系性が欠ける傾向があった。購入された資料・文献が外国語で書かれていることもあって適切な分類・整理が適時にできないこともある。

研究者と充実した専門性の高い司書陣が協力して、体系性を持って外国の文献・資料を集め、また図書館間で収集に適切な分業体制を作ることが望まれる。そうなれば研究者個人が外国の文献・資料を収集しなければならないという問題は削減されるであろう。しかし行革による人員削減は専門性の高い司書の育成を困難にしていると聞く。司書制度と図書館制度の充実が、研究支援体制の充実も考えながら実施されることを望みたい。

(つじい ひろし)